

## 三宅島噴火災害における未就学児とその母親が 抱えた問題について

### Problems which Preschool children and their Mothers faced with Volcanic Disaster in Miyake Island

田中 優\*  
Masashi TANAKA

#### <キーワード>

三宅島噴火災害, 未就学児, 母親, 被災者支援  
Volcanic Disaster in Miyake Island, preschool children, mother, disaster support

#### <要 約>

2000年の夏, 三宅島の雄山が噴火した。同年9月1日, 東京都は全島民への避難指示を行い, 9月4日には, 3800余名の全島民避難が完了した。島民のうち, 小学生に満たない約200名の未就学児(2000年12月時点: 三宅島児童・生徒支援センター, 2002)は, 自宅避難を余儀なくされた。筆者は, 避難後約2ヶ月の時点で, 未就学児をもつ母親に対する集団面接を実施し, 彼女達が抱えた問題を以下の5つにまとめた。

- ①全島避難までの被災によるストレス
- ②時間的展望が持てない避難生活
- ③非被災地における避難生活
- ④広域分散避難によるコミュニティの崩壊
- ⑤育児環境の急激な変化

そして, 筆者は, これらの問題を踏まえて, 以下の3点を目指して, 母親達が主催する自主育児サークルどるふいんへの支援活動を2000年11月より行った。

- I: コミュニティ・ゲートキーパーとしてのニーズのマッチング
- II: 子ども達と母親のストレスの発散
- III: 被災者と支援者との互恵的關係

## 【問題】

三宅島は東京から南へ約180kmに位置し、面積55.5km<sup>2</sup>、周囲38kmでほぼ円形の島である(図1)。島は黒潮本流の中にあり、多くの海洋生物やアカコッコに代表される様々な野鳥等が生息し、「緑の宝石」とよばれるほどに、貴重な自然環境が温存されている。島のほぼ中央に雄山(噴火前山頂部814m)とよばれる火山がある。島民が暮らす集落は雄山を取り囲むように点在しており、神着、坪田、阿古、伊ヶ谷、伊豆の大きく5つの集落から形成されている(図2)。

三宅島は、島全体が1つの火山からなる火山島である。記録に残る第1回目の噴火は、平安時代

の1085年(応徳2年)である。近年の噴火では、1962年(昭和37年)8月、島の東側、赤場暁付近が噴火した。そして、1983年(昭和58年)10月には、西側中腹から噴火している。1085年から1983年の噴火まで、14回の噴火が記録されている(東京都三宅村,1999)。このように、雄山は、約20年周期で噴火を繰り返している。

そして、2000年(平成12年)、1983年の噴火から17年ぶりに雄山が噴火した。今回の火山活動は6月26日の火山性地震から始まり、噴火、噴石、泥流、火砕流及び火山性ガスの排出と様々な種類の噴火活動が発生した。このような雄山の噴火活動の中、6月27日から9月1日までに島外へ自主避難した住民は約2400人であった。そして2000年9月1日に東京都は、全島民3855名への避難指示を行い、9月2、3、4日の3日間で、約1300人が避難をした。そして、9月4日には、全島民避難が完了した。東京都内の主な避難先は、八王子市に628人、武蔵村山市に296人、北区に238人、江東区に197人、港区に179人、江戸川区に174人、国立市に154人(東京都,2000)である。避難者は、避難先の身内や知人宅、あるいは、都営住宅や公

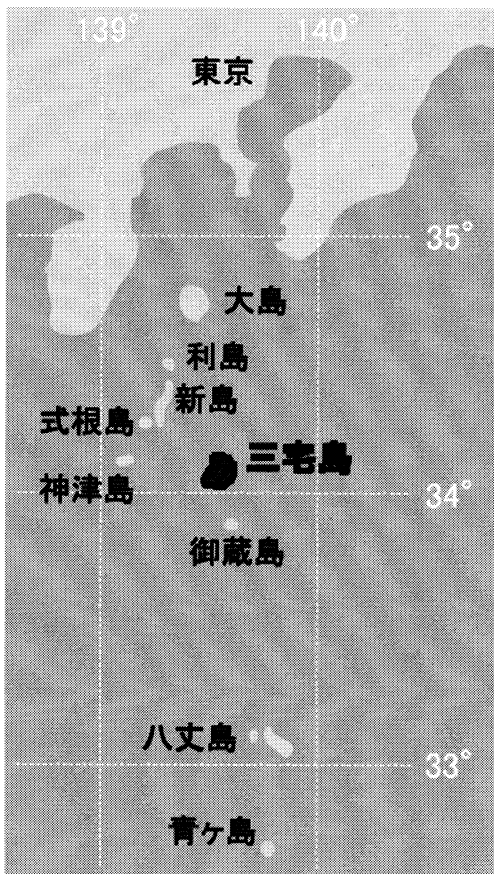


図1：三宅島位置図

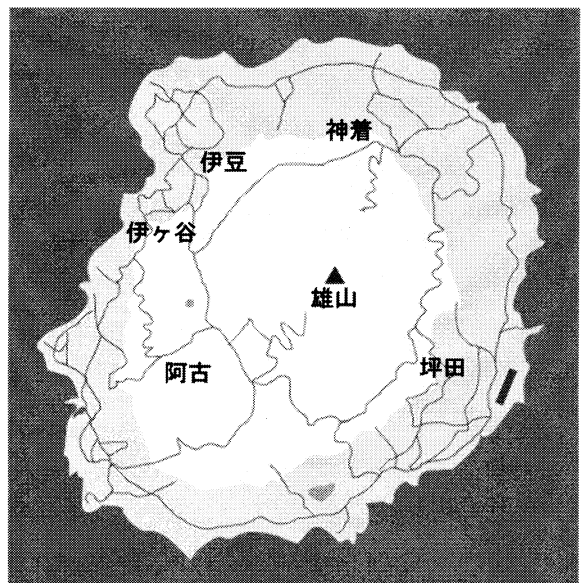


図2：三宅島全図

団住宅で避難生活をする事となった。

避難者のうち、小学生から高校生までの就学児童たちは、東京都あきる野市にある全寮制の旧秋川高校に避難した。避難当初は小学生136人、中学生107人と高校生113人の356人の児童・生徒数であった。両親と離れての集団避難生活が子ども達に与える影響など様々な問題もあったが、就学児童・生徒は行政の保護を受けることができた。

しかし、小学生に満たない約200名の未就学児(2000年12月時点、三宅島児童・生徒支援センター、2002)は、自宅避難を余儀なくされた。過去の自然災害から、乳幼児、高齢者、心身に障害を持つ人、外国人など、災害によりダメージを大きく受ける人たちを災害弱者とよぶ。今回の三宅島噴火災害における広域分散避難、そして、自宅避難という状況は、避難生活を送る上で災害弱者である未就学児とその母親達に、様々な苦難を強いることになった。そのような中、2000年9月の全島避難から約2ヶ月後、多摩ニュータウン地区に避難していた未就学児をもつ母親達が自主的な活動として育児サークルの活動を始めた。

自主育児サークルの活動が始められようとしていた多摩ニュータウン地区には、インターネットを活用した地域づくりと産業振興をはかることを目的として結成された「多摩・未来」というメーリングリストがあった。全島民3800余名のうち、700名近くの避難者が多摩ニュータウン地区に避難することに対して、「多摩・未来」のメーリングリストでは、避難者への支援について、情報や意見の交換、議論などが行われた。そして、全島避難完了から2日後の9月6日には、三宅島からの避難者への支援を目的とした「三宅と多摩をむすぶ会」が結成された。筆者は、「多摩・未来」のメーリングリストのメンバーであった。また、三宅と多摩をむすぶ会の世話役として、会の活動に参加していた。

## 【目的】

本研究の目的は、自然災害時の広域分散避難における未就学児とその母親が抱えた問題点を明らか

にし、それらへのより効果的な支援の提案を行うものである。本報告では、避難から2カ月後の未就学児とその母親が抱えた問題について報告する。

## 【方法】

### 1. 筆者と面接対象者との関係、および、面接の形式について

筆者は、2000年10月27日に行われた「(仮称)第二回自主育児学級in多摩NT」(当日に「三宅島自主育児サークルどるふいん」と会の名称が決定)を初めて訪れた。そして、三宅島から避難している未就学児とその母親が抱える問題を明らかにし、育児サークルへの支援活動の可能性を探りたいという目的を母親達に告げ、彼女らからグループ面接への協力を得た。そして、10月27日に引き続き、11月10日にも、同じ目的でのグループ面接の協力を得た。つまり、第1回目のグループ面接においては、筆者と面接対象者とは初対面であった。そのため、10月27日と11月10日の両日も、個別の面接ではなく、被面接者ができるだけ自由に発言しやすいグループ面接の形式を採った。面接では、話題のきっかけのみを提示し、話題の方向付けは極力行わず、母親達が自由に話せることを心がけた。なお、両日も、面接対象者の了承を得て、ICレコーダーにて面接内容を記録した。

### 2. 面接対象者

面接対象者は、三宅島自主育児サークルどるふいんの活動に参加する母親達であった。

- |     |     |                           |
|-----|-----|---------------------------|
| Aさん | 37歳 | 男児(4歳)、男児(1歳)、<br>女児(4ヶ月) |
| Bさん | 38歳 | 女児(3歳)                    |
| Cさん | 32歳 | 女児(3歳)、女児(9ヶ月)            |
| Dさん | 33歳 | 男児(7ヶ月)                   |
| Eさん | 33歳 | 男児(5歳)、男児(2ヶ月)            |
| Fさん | 28歳 | 女児(2歳)                    |

### 3. 面接者

面接は、すべて筆者自身が行った。

### 4. 面接日時

2000年10月27日 (金曜日) 15:10から16:00

2000年11月10日 (金曜日) 13:20から14:30

なお、この時期は、全島避難から約2カ月後であり、未就学児をもつ母親達が自主的な活動として、育児サークルの活動を開始しはじめた時期であった。

### 5. 面接場所

せいがの森保育園 (八王子市) 内コミュニケーションルーム

### 【結果】

母親の発言は、できるだけ個人が特定できないように、「母親1, 母親2」などとして記載した。なおこの記載は、同じ囲み内では、同じ発言者を表すが、異なる囲み内においては、同じ発言者とは限らない。

#### 1. 全島避難までの被災によるストレス：

母親1：ピリピリとしている部分と、あと地震がずうっと続いてて…

母親2：地震がずっと…

母親1：時々おっきいのが来ると…

母親2：うちなんかもうテレビが落ちてきて、壊れちゃって、それがすごくショックだったみたいで。「テレビ落ちたね」って。

母親1：すごい緊張感が、生活してて、だから、夜とかもね。寝るときに、倒れちゃいけないからって部分で、安全な場所であつて…。その、かなり停電が続いたとかもあつて、ろうそくなんか、だいたいつ

けて、そういう中で子ども達が、子ども達にも多分、緊張が伝わってると思うんですけど…。で、母親はもう、子供守ろうっていう防衛本能ばかり、ワツ！て発達しちゃって…。

母親1：こっちも不安だから、夜中にも、しょっちゅう起きて、雄山がどうの…。それを子供も見てるから、やっぱり…。で、毎朝、お散歩に行ってたんだけど、その時、「雄山が…、今日は雄山が見えるね」とか、「また、形が変わったね」とか、それが、子供との会話に…。

母親2：テレビの臨時速報のピンポンパツという音にすごい子供が反応してて、「地震？」とか。なんか官房長官やめる…ピピピ、「地震？」とか。そういう、「また噴火したの？」とかね…。

母親1：3歳児とかって、3, 4歳とか難しい時期っていう、それが、もしかして島にいたら普通のことだったのか、それとも避難してるからこうなのか？っていうのがこう、わかんなくて。こういう環境だからこんな風な態度になつたのっていうのかしらとか…。

母親2：ものすごくあるね。なんか無理言つて、泣いてみたりね。

母親1：そう、3歳だからなのか、それとも、こう不安だからなのか。それがわからない。

母親3：で、親としても、こう、もう出来ることをね、あのお、甘たれて言ってきたのを、やっぱり、ある程度受け止めていいのか…。変に甘やかすときと、こっちの精神状態で、邪険にすると、後で反省して。ま、それはね、普通に育ててきてもあることなんだろうけども、それを変に「あ、今やっぱり、あ

の、この子の気持ちとして、そういう、なんか、あのやっぱり、抱きしめてあげなくちゃいけないのかなって、過剰反応してしまったり？それがこう、親も、こうなってるね。

6月26日の火山性地震から9月1日の全島避難までの約2カ月の間に、島民達は、地震、がけ崩れ、降灰、泥流、噴石、火砕流と、多くの災害を経験している。母親達は、「地震のたびに、子どもを守らなければならないという気持ちで、常に緊張していた」、「その緊張が子どもに伝わって、何か悪い影響はないかと心配である」と述べた。このような状況での子どもと母親へのストレスは大きなものであると考えられる。一般に、三宅島からの全島避難の2000年9月4日を起点とした避難生活に注目が集まる傾向があるが、島民達は、全島避難前の2ヶ月で非常に大きなストレスを経験し、その上さらに、避難生活という大きなストレスを受けていたのである。

## 2. 時間的展望が持てない避難生活：

母親1：先が見えないというので、まあ、3月までですよっていったら、私たちは、じゃ、保育園は待つよりね、帰ってから申し込みましょう、でいいんですけど。もっというるかも知れないけど、今もう、幼稚園、保育園の申込み（の時期）に来てるしね。どうしたらいいか…。あと、まあ、経済的にも、そんなちょっと入れるだけで、入園金とかどうすんだらうとか…。また入れるんだったら下も入れて働こうかしらとか、そういう、結局解決方法がない中で、頭の中で、どうしよう、こうしようって、結局いつ帰れるのかを問題に…。

母親2：被災されたというと、あれ、比べると変なんですけど、地震でね、失ってしまったというのとは違うんですね。

帰ればあるんだもんね。元の生活に戻ることもできるっていう。

母親3：いつになるのか、五里霧中なのか、一年後なのか…。もう、ずっとなのか、家はあるけれども。もう、ずっともう、そしたら、帰れないかも知れない…。それはもう、まったく、誰にもわからないし…。

台風、地震、津波などと比較すると、火山噴火災害はその予知が難しいとされている。今回の三宅島噴火災害では、有毒な火山ガスの放出による被災の可能性が無くなることの予測が難しいため、避難者は、避難生活、その後の復興への目標を設定できなかった。母親達は、「子どもの発達を考えれば、保育所に入れることが良いと思うが、経済的な問題が大きい。避難生活が長期化するのかがどうかがわからないため決断できない。」と語っていた。

阪神・淡路大震災では、「がんばろう神戸」をスローガンに、自らの復興へ向けて、被災者達は進むことができた。しかし、三宅島噴火災害においては、「がんばろう三宅」というスローガンはあてはまらない。

## 3. 広域分散避難によるコミュニティの崩壊：

母親1：今、若い母親って言うかな、ちっちゃい、まだ学校に行っていない子供達をもっている母親としては、やっぱりあの、こちらの方（東京）でもそうだと思うんですけど、団地の自室で、子供と自分との会話、近所にまあいればね、多少その会話。そのなかでやっぱり、こちらにずっと暮らして、生み育ててらっしゃる方でストレスってあると思うんですよ。その部分が我々は、結局、突然こういう状態になって、それまでの子育てしてたモノの面、生活環境の面も、それなりに構築されていたんで

すが、それが、いきなりゼロになって  
しまっ…。モノはそこそこ集まって  
きてるんですね、

母親2：今、物質的な面よりもやっぱりあの…

母親1：やっぱりあの、息抜きがほしいって  
いうのが、今一番、共通でしてね。

母親1：例えば、まだ避難してから美容院にも  
いけないとかね…。ちょっと自分の体  
の調子が悪いから病院に行きたいけど  
…、子供二人、三人連れてね、病院、  
慣れない病院に行かなければいけない  
って言うのは…。

母親1：うちの子も3歳児だから…

母親2：そう、で、今度、お友達を探してあげ  
なきゃとも思うんだけど、公園にいっ  
てもやっぱりもう、3歳児だと、(地元  
の待機児童だけの)サークルをやっ  
てるっていうんで、(子供が)いないん  
ですよ。

母親1：だいたい2歳児くらいの子が、こうい  
てて、ま、そこに行って毎日、公園に  
は毎日行って遊ぶんですけど、やは  
り遊びが違うというのか…。

今回の避難では、東京都北区、八王子市、武蔵  
村山市などが主な避難地域となり、避難者の多く  
は空きのあった都営住宅等に入居した。また、身  
内や知人を頼ったり、個別の事情から自主避難し  
た人も多数いた(三谷(2001)によれば、9月  
1日の全島避難以前に、2000名以上の島民が自主  
避難をしていた)。2001年7月時点で、島民の分  
布は18都道県、都内での分布は23区26市3町3村  
(三谷,2001)におよび、広域分散型の避難が行わ  
れた。さらに、避難先の住所は、個人のプライバ  
シー保護から公開はされなかった。物理的にも、  
情報的にも、避難者の被災前のコミュニティは大

きく崩壊してしまった。母親達は、「子どもに友  
達を作ってやりたいが、公園に行っても同じ年頃  
の子どもがいない」、「公園に行っても、地域の母  
親にとけ込むことが難しい」と語った。彼女たち  
は、都市部の母親が悩む密室育児と類似した状況  
を突然経験し、また、三宅島では考えもしなかつ  
た、いわゆる公園デビューの難しさに直面してい  
た。また、育児の補助を頼めないため、「避難し  
てから、まだ美容院にも行ってない」「自分の体  
調が悪いからといっても、子ども2、3人を連れ  
て慣れない病院に行くことはつらい」など、育児  
から開放される時間を切実に求めている。

#### 4. 非被災地における避難生活：

母親1：三宅島だと、まあ、だいたい年に生ま  
れて40人ぐらいですので、保育園自体  
は、もう、待機児童はゼロなんですよ  
ね、ほぼ。どっちかっていうと、もう、  
2歳、3歳になったら、「預けなさい  
よっ」という風に園の方から勧誘があ  
って…。「あ、そうか、近所に子供も  
いないし、預けちゃおうかなっ」て預  
けてしまうと、朝8時半から、夕方4  
時ぐらいまで預かってもらって…。そ  
の間、結局、親、母親が働いてる義務  
はないですので、向こうだと。働いて  
らっしゃるお母さんもいるけども、働  
らないお母さんでも…。うちなんか  
だと、まあ、3人いて、一番上の子は  
入れてて、下の子も養育って名目で、  
もう、保育…、保育園に入れられるん  
ですよ。そういう状況で今まで暮ら  
してきて、子育てをしてきてる中で、  
こちらに来て…。こう聞いてみると、  
保育園でね、待機児童が何百人だつ  
て言われてしまっ。じゃ、今、「避難  
民だから優先して入れてあげますよ」  
っていう声もいただいたんです、ほん  
とありがたいんですが…。ただ、その  
中で、「ああ、ありがたい。じゃあ、

入れます」ってことはね…。地域で今暮らしている者として、例えば、隣近所の奥さんとも話しててね、「うちの子入れたいんだけど、まだ入れないのよ」って言われてるのに…。「あら、避難民の子だから入れちゃったの」っていう…。せっかくね、いい関係、コミュニティで生きていこう、こう仲間に入れて頂こうとしている段階で、「それはできない」っていう部分と…。

野田(1994)は、外部社会が被災者に対して「被災者役割」つまり、被災者らしさを求めていると指摘している。ラファエル(1986)は、外部社会から被災者に期待する型どおりの振る舞いや、期待どおりの悲嘆の表出は、多くの場合、被災者の自然なそれらとは異なっている場合が多く、このことが被災者のストレスを増幅させることになる」と述べている。また、彼女は、外部社会がある期間を過ぎた被災者(遺族)に対して、「もう当然立ち直っている頃だ」という期待をあからさまに見せつけ、この期待と被災者の現実とのギャップが被災者を苦しめるというもう一つの問題も指摘している。

1997年の阪神・淡路大震災では、自宅を失った多くの被災者が、被災地内の避難所や仮設住宅などに避難した。しかし、三宅島噴火災害では、被災地内ではなく、非被災地への全島避難が行われた。母親の中には、「保育所に子どもを入れたい気持ちがあるが、地域にはたくさんの待機児童があり、その子ども達を差し置いて、被災者だからという理由で、特別に入園させることはできない」、「(避難先の)コミュニティの仲間に入れてもらおうとする段階で、このようなことはできない」と、避難者が非被災地の住民と共存することの難しさを語った。このように、非被災地での避難生活では、避難先の住民と被災者である自分との社会的比較から、被災地内での避難と比べて、被災者役割をより強く意識することが指摘されている。

## 5. 育児環境の急激な変化：

母親1：～子ども達に、こう、怒るせりふが今違うんですね。島とね。そう、で、集合住宅がね、やっぱりこちらだと、下の階にね、人がいれば「走るな!」、で、高層、うち高層なんですけど…。高層だと「ベランダに出るな!」「ものを持ってベランダに出るな!」…。うん、そういう方面で、すごく、(島では)怒らなくていいシーンで怒っているので、すごくストレスが溜まる。

母親1：で、島の生活は必ず、まあ、みんな車を持って、特に子育てしてる人は、だいたい車で移動…。(する)ともう、家から出たら、出て車に乗せて、で着いたらそこから車から降りして、で荷物なんか持っても、あとトランクに積んじゃえばいいやっていう生活をしてきて、かなりだから、こちらのお母さん達に比べると、ずいぶんぐうたらな母親をやってたんですけども、それが、当たり前で今きちゃってたんですね。で、その当たり前が急にとっばらわれて、今、車が欲しいと思ってる人、すごく多いと思うんですけど。

母親達は、「(高層の集合住宅での生活なので)下に人がいるから走るな」「ベランダに物を持って出るな」などと、三宅島では怒らなくていいことで怒っているために、非常にストレスが溜まっていると述べた。また、「三宅島では、ドアを出て、子どもを車に乗せて、目的地に着いたら子どもを降ろすという、車での移動が普通だった。それができない今、慣れない土地で、3人の子どもを連れての外出は、母親にとっても、子どもにとってもつらい」などと、それまでの育児環境の大

きな変化への適応は難しく、そこからくるストレスの大きさを訴えていた。

【考察】

未就学児とその母親が抱えた問題は、以下の5つにまとめることができる。

- ①全島避難までの被災によるストレス
- ②時間的展望が持てない避難生活
- ③広域分散避難によるコミュニティの崩壊
- ④非被災地における避難生活
- ⑤育児環境の急激な変化

筆者は、それぞれの問題を意識しながら、次の3点を目指して三宅島育児サークルどるふいんへの支援活動を行った。

I：コミュニティ・ゲートキーパーとしてのニ

ズのマッチング

II：子ども達と母親のストレスの発散

III：被災者と支援者との互惠的關係

まず、I：コミュニティ・ゲートキーパーとしてのニーズのマッチングについては、田中(1998)や田中と高木(1997)は、阪神・淡路大震災において非被災地である大阪府に建設された遠隔地仮設住宅に注目し、被災者の被支援欲求と地域住民等の支援欲求のマッチングを行うコミュニティ・ゲートキーパーの役割について説明している。コミュニティ・ゲートキーパーとは、問題を抱えたコミュニティの住民と専門家との間の情報の橋渡し、つまり被援助者と支援者とのニーズのマッチングをする役目を果たす人のことである。今回の三宅島噴火災害における避難者は、非被災地に避難したという点で、遠隔地仮設住宅への入居者との類似点が非常に多い。筆者は、三宅島自主育児サークル「どるふいん」への支援を行うにあたり、

### 三宅島育児サークルどるふいん

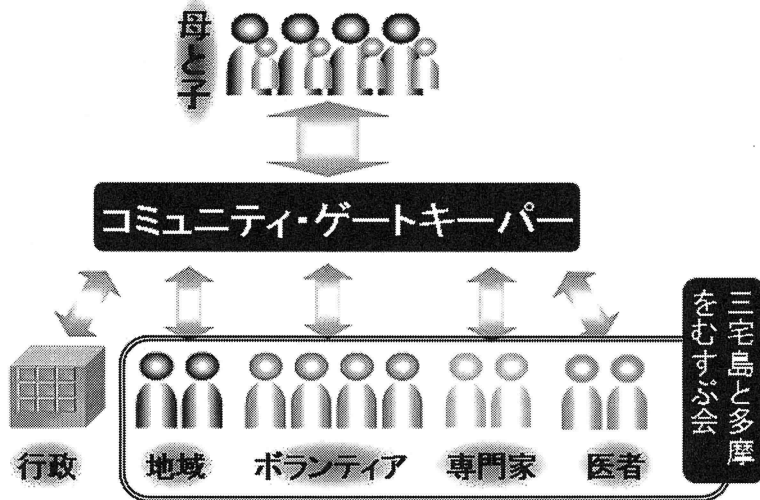


図3：三宅島自主育児サークル「どるふいん」におけるコミュニティ・ゲートキーパーの役割



コミュニティ・ゲートキーパーの役割を強く意識し、子ども達と母親への支援を行った(図3)。このことは、子ども達と母親が抱えた問題の③広域分散避難によるコミュニティの崩壊や④非被災地における避難生活への効果的な支援を目指したものである。

次に、Ⅱ：子ども達と母親のストレスの発散については、大学内のキャンパスやプレイルームで、子ども達にはできるだけ大きな声を出したり、走り回ったりする環境を提供した。また、女子大学生を子供の遊び相手にすることにより、母親には気兼ねなく、母親達の息抜きの時間を提供した。女子大学生を子供の遊び相手としたメリットについては、女子大学生は、母親達にとって、自分の妹くらいの年齢であり、まだ子育ての経験はないが、しかし、子育てについては興味を強く持っている点にあった。これが、母親よりも年上で、育児経験がある女性であれば、母親に子育てについての口出しをするなど、母親にとっては気を使う存在となってしまうのである。子供に対して知識がないため、むしろ、母親を頼り、そして、一生懸命に子ども達の相手をする女子大学生は、母親にとっては、安心して子供の遊び相手を任せることが出来る存在であると考えられる。このことは、①全島避難までの被災によるストレス、②時間的展望が持てない避難生活、⑤育児環境の急激な変化への効果的な支援を目指したものである。

そして、Ⅲ：被災者と支援者との互恵的関係については、母親達の心理的負債感を低め、長期的で効果的な援助を行うことを目指した。心理的負債感(Greenberg,1980)とは、他者から援助されることが一種の負債を負った状態を生みだし、それが不快感の源泉となることで、他者に返礼するように義務づけられた心理状態を意味する。被災者(被援助者)は、他者から援助されることにより、「申し訳ない」、「お返しをすることができない」など、一種の負債を負った感覚を体験し、それが不快感の源泉となる。この状態は、他者に返礼するように義務づけられた心理状態である。災害時における長期的な支援活動において、被災者の抱く心理的負債感には、必要な援助要請を

抑制し、結果的に支援活動を滞らせることとなるのである。筆者は、互恵的な対人関係を象徴的に被支援者と支援者とが確認できるイベントとして、一般の卒園式にあたる「ありがとうの会」を行った。「ありがとうの会」は支援活動において、被支援者と支援者が、それぞれ得たものに対して、お互いにそれらを確認することにより、被支援者は被支援者としての役割(被災者役割)からくるストレスや心理的負債感から開放されるという考え方に基づいている。

#### ありがとうの会プログラムから

そして今日、子ども達、お母さん、お父さんからの「ありがとう」を、また、いろんな形でのサポートをしてくれたサポーターからの「ありがとう」を互いに確認する会を開くことになりました。

三宅島自主育児サークルどるふいんに参加した未就学児とその母親たちは、精神的なケア等のサポートを得ることができた。この援助、あるいは、支援が困窮者に対して与える恩恵に関する効果を「援助効果」とよぶ。また、ボランティアとして子ども達と接した、女子大学生も、ボランティアとは何か、災害とは何か、母親と子どもの関係とはどういうものかなど、今回の活動から、それぞれが、何らかの学びを経験したと考えられる。この、援助者、あるいは、支援者が、援助や支援活動から得ることができた恩恵に関する成果を「援助成果」とよぶ。被支援者と支援者が、ともに、援助効果と援助成果を確認できることは、互恵的な関係を作り出し、長期的で効果的な支援活動を可能とするのである。

今後の課題としては、Ⅰ：コミュニティ・ゲートキーパーとしてのニーズのマッチングについて、Ⅱ：子ども達と母親のストレスの発散について、そして、Ⅲ：被災者と支援者との互恵的関係について、支援活動の効果測定を行うことが考えられる。Ⅰについては、活動に参加した未就学児

やその母親, および, 彼女らを支援したボランティア達を対象として, 支援者と被支援者とのニーズのズレを明らかにすることにより, また, IIについては, 活動参加時のストレスについて, 母親達への調査や, 将来的に調査が可能となった年齢での子ども達への調査により, そして, IIIについては, 母親の心理的負債感と援助効果の認知, および, 支援者の援助成果の認知をそれぞれ明らかにすることにより検討できると考えられる。

### 【引用文献】

- Greenberg, M.S., 1980 A theory of indebtedness. In K. Gergen, M.S. Greenberg, & R. Willis (Eds.), *Social exchange*. John Wiley & Sons.
- 三谷 彰 2001 三宅島 島民たちの一年 岩波ブックレットNO.542 岩波書店
- 三宅島児童・生徒支援センター 2002 三宅島児童・生徒支援センター支援対象  
<http://www.miyakejima.net/akikawa/taisyuu.html>  
(2003年9月現在)
- 野田正彰 1995 災害救援 岩波新書
- ラファエル, B. 1986 石丸正 (訳) 1989 災害の襲うときーカタストロフィの精神医学 みすず書房
- 田中優 1998 仮設住宅の運営 松井豊・水田恵

三・西川正之 (編) あのとき避難所はー阪神・淡路大震災のリーダーたち プレイン出版 pp.115-135.

- 田中優・高木修 1997 阪神・淡路大震災による遠隔地仮設住宅における被災者の研究 (1) 実験社会心理学研究, 37-1
- 東京都三宅村 1999 三宅村データボックス1999 東京都三宅村役場
- 東京都災害対策本部 2000 東京都災害対策本部の対応等について (第180報) 三宅村の避難先別人数について  
<http://www.metro.tokyo.jp/SAIGAI/HISAI/MIYAK280.HTM> (2003年9月現在)

### 【謝辞】

三宅島自主育児サークル「どるふいん」に参加した子ども達とそのお母さん方, そして, 活動を支えていただいた学生達やサポーターのみなさんに, この研究の意義を理解していただき, 多大なご協力を賜ったことに対して, 心から感謝いたします。また, 活動を可能とする大きな要因であった活動場所の提供等において, 大妻学院の関係者の皆様に感謝いたします。そして, 三宅島の方々の, 一日も早い, 安全な帰島をお祈り申し上げます。